



キャラバンメイト「ロバの会」通信 vol.18

認知症サポーターキャラバン



寺田 律子

北海道傾聴塾 会員
傾聴とは、お話を聴かせて頂くボランティアのことです。話すことで気持ちが楽になったり、心の整理ができたりするお手伝いをさせていただきます。



こんにちは、今回は寺田が「認知症の症状別対応」について大阪大学精神医学教室・数井裕光先生の本を参考にお伝えします。

今日のテーマ【 対応の仕方 】

認知症の人の問題行動には、それなりの理由があります。その根本原因が解消されない限り、何度も同じようなこと繰り返します。

見 当 識 障 害

見当識とは、「今がいつなのか（時間）」「ここがどこのか（場所）」がわからなくなる状態です。

環境が変わった時（引越しや入院、子供との同居）にとりわけ強く現れます。

現在を、自分が若かった頃と勘違いして、さらに周囲の人や状況をその頃にあわせて解釈しようとすることがあります。たいていは、ご自身が一番輝いていた時代、たとえばバリバリ仕事をしていた頃や子育てに追われていた頃に戻ることが多いようです。

昔のことを今のように話されるので、「昔の思い出のなかに生きている」ようにも思えます。

「子供はまだ小さい」と思っているため、おじいちゃんになった息子を見ても誰だかわからなかったり、夫と間違えたりします。

朝・昼・夜の区別がつかなくなって、夜中に買い物に行こうとすることもあります。

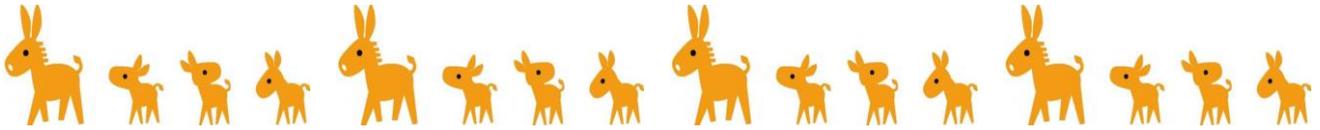
季節感も乏しく、季節にあった服装が選べなくなります。

「ここは自分の家ではない」と言い、昔住んでいた家や実家に帰ろうとすることもあります。

対 応 法

○ 時 間

- なじみの場所にカレンダーを貼って、誰かといっしょに「今日は○月○日○曜日」と○をつけましょう。
- 日ごろの会話の中で「もう春ですね、暖くなりましたね」「今日は7月7日、七夕ですね」など、季節や日付を感じさせる内容を織り込みましょう。
- 時計を日付・曜日・午前・午後の入ったデジタルに替えてみましょう。
- 窓を開けて昼夜の区別がつくようにしましょう。
- 若い頃に戻って話をしている本人に「違います」といっても意味がありません。あえて否定せず、相槌をうちながら本人の話を真剣に聞いてあげてください。裏へつづく



○ 場 所

- 「ここは自分の家ではない」という本人に「あなたの家ですよ」と説明するのはむずかしいです。家かどうかよりも「とにかくここは、安心して居ることができるところだ」と思ってもらえることが大事です。
- 転居や改築、施設への入所など住む環境が変わるときは、本人の思い出の品や使い慣れた家具などを持って行きましょう。
- 入院した場合は、できるだけ家族が面会に行って、本人が不安にならないように気を配ってあげると早い段階での退院が期待できます。

○ 人

- アルツハイマー病では、かなり進行してくると家族の見分けがつかなくなってきます。鏡に映る自分の姿がわからなくなることもあります。しかし、知人程度なら、わからなくても上手に「とりつくろ」って不自然さを感じさせません。これは、この病気の人すばらしい能力です。
- 家族を見ても別の家族だと思ったり、実際に子供が一人しかいないのに「もう一人息子がいる」などと言って周囲を驚かせることがあります。その場合、「違います」と否定したり説明しようとするとかえって混乱して怒りだしたり、パニックを起こしたりします。まずは、受け入れて聞き、不安にならないようにしましょう。
- 本人が「馬鹿にされている」「軽く扱われている」と思わなければ、家族のことをわからなくなるがあっても、お互いの信頼関係を保ち続けることができます。



『キャラバンメイト・ロバの会』は、みなさんの応援者です

【お問い合わせ】キャラバン・ロバの会
代表 斉藤千香子 ☎ 090-6215-5822
地域包括支援センター ☎ 5-1165



認知症サポーターキャラバン